研究ノート

保育士養成課程における学生の学習行動
―授業に対する意識・態度の規定要因に着目して―

西本佳代*1

キーワード：保育士養成課程、学習行動、質問紙調査、学習支援

1　はじめに

本研究の目的は、保育士養成課程における学生の学習行動の規定要因を明らかにすることである。近年、保育士の専門性を高める必要性が叫ばれている。平成20 年度版保育所保育指針では、「保育所における保育士は、児童福祉法第18 条の4 の規定を踏まえ、保育所の役割及び機能が適切に発揮されるように、倫理観に裏付けられた専門的知識、技術及び判断をもって、子どもを保育するとともに、子どもの保護者に対する保育に関する指導を行うものである」と示された[1)]。この記述に対し、保育所保育指針解説書では、具体的に、保育士の専門性として「(1) 子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、その成長・発達を援助する技術、(2) 子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識・技術、(3) 保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術、(4) 子どもの経験や興味・関心を踏まえ、様々な遊びを豊かに展開していくための知識・技術、(5) 子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちに寄り添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識・技術、(6) 保護者等への相談・助言に関する知識・技術」が挙げられた[2)]。保育士は、子どもに対する養護と教育のプロであるのはもちろんのこと、多様化する保育ニーズに対応した、保護者の援助者であることが求められている。

平成25 年4 月現在、保育士を養成する施設は全国で601 施設存在する[3)]。これらの施設で学生が学ぶ間に専門性をできるだけ身につけさせ、就職後に活躍してもらうことが理想である。しかし、保育士養成施設に通う学生のすべてが保育士になりたいと願い、学習に熱心に取り組んでいるわけではない。保育士養成施設の中には選抜性の高くない施設も数多く含まれている[註1)]。その選抜性の低さに鑑みれば、学生の多様化が進んでいることが推察される。すなわち、目的意識なく進学してしまったり、基礎学力がないまま保育に関する勉強をはじめる学生がいるものと考えられる[註2)]。もちろん、選抜性の高い施設でないと保育士としての専門性を高められないというわけではない。しかし、ある程度の基礎学力がなければ、保育に関する基礎的な知識や技能を身につけさせることが難しく、専門性の獲得までには時間がかかる。また大学入学以前から学習そのものに苦手意識がある学生については、授業を集中して聞くことすら困難である。保育士としての専門性の育成という課されたテーマと、入学してくる学生の質との間で板挟みになっているのが多くの保育士養成施設の現状ではなかろうか。

そこで、本稿では、学生の学習行動、特に授業に対する意識・行動がどのような要因によって規定されているのか検討したい。意欲的に授業に取り組む学生とそうでない学生との違いは何なのか、またその違いに授業内容や教員の対応といった大学側の努力はどの程度影響を及ぼしているのか分析する。それらの作業を通して、保育士養成課程における学習支援の在り方を考察する。

*1　山口福祉文化大学　ライフデザイン学部

２　研究の方法

２．１　大学生の学習行動

近年、大学生の学習に関する研究が蓄積されつつある。特にその傾向が顕著にみられるのは、アメリカのカレッジインパクト研究であり、その主要な知見は「学生の学習への関与（Engagement）は学生の学力や動機によって決まっている部分も大きいが、大学の教育プログラムなどの効果も確認できる」[4] という点にまとめられる。こうした知見をもとに日本においても分析が進められ、双方向型授業と学生配慮型授業を積極的に導入している大学の学生の授業外学習時間が長いこと（両角 2009）[5] や、大学入学以前に自立的に活動している学生ほど大学教育の影響力を高く評価していること（村澤 2003）[6]、さらには、ボーダーフリー大学において大学教育の成果を高めるためには教育の質を充実させる必要があること（葛城 2009）[7] などが明らかにされている。しかし、小方（2009）[8]も指摘するように、専門分野間の違いは明確であり、「専門分野や学生の文脈に応じた分析」が必要とされる状態である。すなわち、保育士養成課程に通う学生の特徴について明らかにするには、彼女たちをサンプルとした分析が必要になる。

保育士養成課程に通う学生の学習行動については、これまで主に実習との関係から論じられてきた。例えば、中原（2006）[9]は、保育体験実習が学習意欲やその後の実習に向かう動機にポジティブな影響を及ぼしていることを明らかにした。また、森（2003）[10]は、保育者に求められる技術面への自己評価が実習経験によって高まることを指摘している。こうした研究は、実習という教育プログラムの位置づけを検討するうえで非常に参考になる。しかし、特定の因果関係を明らかにすることに主眼が置かれ、大学教育全体の影響は明確でない。学生の学習行動について検討にするには、そうしたミクロな視点での研究と同時にマクロな視点からの分析が必要となるだろう。

そこで、本稿では、保育士養成課程に通う学生をサンプルとし、彼女たちの学習行動がいかに規定されているのか、学生特性、教員特性、カリキュラム特性の大きく三つの観点から検討したい。学生特性として挙げるのは、性別のほかに、大学入学以前の学習状況、日常生活の様子、大学入学後の学習状況、日常生活の様子、専門的知識・技能の獲得状況である。ここから、大学入学以前、以後の学生の特徴が学習行動にどのような影響を及ぼしているのか検討する。教員特性については、調査を実施した大学にどのような教員が存在しており、その存在が学生の学習行動にどのような影響を及ぼしているのか確認するために取り上げた。さらに、カリキュラム特性として専門的授業に対する満足度が学習行動に与える影響についても分析する。以下では、調査対象者の基本的な情報を確認したのち、学生特性、教員特性、カリキュラム特性の及ぼす影響について考察したい。

２．２　分析対象

分析に用いたデータは、2008 年 11 月から 2009 年 2 月にかけて実施された学生調査（「大学生の学習経験・生活に関する調査」研究代表者：有本章）である。この学生調査は、中国、四国、関西地方に所在する 11 大学（私立大学 6 校、国立大学 4 校、公立大学 1 校）、4,363 名を対象に実施された。本稿では保育士養成課程に通う学生の特徴を明らかにするため、11 大学の中から、該当する私立H大学の短期大学部の学生を抽出し、分析の対象とした。

私立 H 大学短期大学部の偏差値は 40 程度である。サンプル数は 192 名であり、募集定員数を基にした回収率は 96.0%となっている。表 1 は、調査対象者の属

表 1.　調査対象者の属性

男性	女性	合計
6.3	93.8	100.0(192)
1 年	2 年	合計
47.9	52.1	100.0(192)

註：値は%。括弧内は実数。

表 2. 授業に対する意識・態度

	とても あてはまる	少しあて はまる	どちら でもない	あまりあて はまらない	全くあて はまらない	合計
大学の授業では幅広い知識を得られると思う	21.4	47.4	21.4	8.3	1.6	100.0(192)
大学の授業では専門的知識を得られると思う	42.7	46.9	7.8	1.6	1.0	100.0(192)
大学の授業は役に立たないと思う	1.0	4.7	11.5	45.5	37.2	100.0(191)
授業はできるだけ休まないようにしている	44.8	33.9	10.9	7.8	2.6	100.0(192)
きちんとノートを取りながら授業を聞いている	19.8	43.8	19.8	15.1	1.6	100.0(192)
成績はできるだけＡ(優)を取ろうとしている	15.1	34.4	29.2	12.5	8.9	100.0(192)
自分の成績は良い方だと思う	2.1	15.7	46.6	20.9	14.7	100.0(191)
授業の内容について質問することがある	1.6	12.0	33.3	38.0	15.1	100.0(192)
授業中によく居眠りをする	14.1	38.0	28.1	12.0	7.8	100.0(192)
授業中に携帯電話でメールの読み書きをする	9.9	38.5	23.4	17.7	10.4	100.0(192)
授業中に私語をすることが多い	5.7	21.9	34.4	27.1	10.9	100.0(192)
授業中、授業に関係のない本を読んだり、他の勉強をしたりすることが多い	2.6	25.0	33.9	30.7	7.8	100.0(192)

性を示したものである。男性 6.3%、女性 93.8%中心のサンプルとなっている。学年については 1 年生と 2 年生がほぼ同程度の割合である。

３　分析

３．１　授業に対する意識・態度

保育士養成課程に通う学生の学習行動は何の影響を受けているのだろうか。分析をはじめるにあたり、まずは私立H大学短期大学部の学生が授業に対してどのような考えを持っており、授業中にどのようなふるまいをしているのか、確認することからはじめたい。表 2 は、授業に対する意識・行動について問い、得られた回答である。

この結果からは、学生の多くが授業に価値をみいだし、比較的まじめに授業に取り組んでいることがわかる。具体的にみてみよう。「大学の授業では幅広い知識を得られると思う」に「とてもあてはまる」もしくは「少しあてはまる」と回答した学生（以下、「あてはまる」と回答した学生と表記）は 68.8%、「大学の授業では専門的知識を得られると思う」に「あてはまる」と回答した学生は 89.6%となっている。また、「大学の授業は役に立たないと思う」に「あまりあてはまらない」もしくは「全くあてはまらない」と回答した学生（以下、「あてはまらない」と回答した学生と表記）は 82.7%となっており、授業を価値あるものだと位置づけていることがわかる。

また、彼女たちの多くは比較的まじめ授業に取り組んでいる。「授業はできるだけ休まないようにしている」に「あてはまる」と回答した学生は 78.7%、「きちんとノートを取りながら授業を聞いている」に「あてはまる」と回答した学生は 63.6%となっていた。しかし、「成績はできるだけＡ（優）を取ろうとしている」という学生は 49.5%と半数程度しかいない。また、「自分の成績は良い方だと思う」と自信をもっている学生は 17.8%であり、「授業の内容について質問することがある」という積極的な学生は 13.6%しかいない。まじめに授業に出席し、ノートをとる学生は数多い。けれども、良い成績をとるため努力したり、教員に質問したりする学生は必ずしも多くない。比較的まじめに授業を受けているが、積極的に授業に取り組むという段階にまでは達していないことがわかる。

他方、授業中に他の行動をしている学生が多いことも気にかかる。「授業中によく居眠りをする」に「あてはまる」とした学生は 52.1%、同様に「授業中に携帯電話でメールの読み書きをする」は 48.4%と約半数が該当している。また、「授業中に私語をすることが多い」、「授業中、授業に関係のない本を読んだり、他の勉強をしたりすることが多い」についてもそれぞれ 27.6%

表3. 授業に対する意識・態度に関する因子分析

	成績重視	授業外行動	授業肯定
授業はできるだけ休まないようにしている	0.735	-0.194	0.080
成績はできるだけＡ(優)を取ろうとしている	0.708	-0.221	0.198
自分の成績は良い方だと思う	0.655	-0.095	-0.059
きちんとノートを取りながら授業を聞いている	0.594	-0.207	0.180
授業の内容について質問することがある	0.419	0.086	0.084
授業中、授業に関係のない本を読んだり、他の勉強をしたりすることが多い	-0.017	0.713	-0.137
授業中に私語をすることが多い	-0.046	0.671	-0.071
授業中に携帯電話でメールの読み書きをする	-0.142	0.523	0.037
授業中によく居眠りをする	-0.156	0.442	-0.080
大学の授業では専門的知識を得られると思う	0.156	-0.046	0.961
大学の授業では幅広い知識を得られると思う	0.136	0.003	0.553
大学の授業は役に立たないと思う	-0.013	0.272	-0.415
回転後の負荷量平方和	2.089	1.650	1.521
分散のパーセント	17.412	13.748	12.676
累積パーセント	17.412	31.161	43.837

註：最尤法、バリマックス回転による。

と約3割も該当者がいる。

調査対象者の多くは、授業を価値あるものだと位置づけ、授業に出席している。しかし、なかなか授業に積極的に取り組むことができず、ついつい居眠りや携帯メール等の他のことをしてしまうという状態ではなかろうか。では、こうした学生の授業に対する意識・行動がどのような因子から構成され、どのような特徴をもっているのか検討したい。表3は、授業に対する意識・態度について、因子分析を行った結果である。因子分析の結果、次の三因子が抽出された。

第一因子【成績重視】

「授業はできるだけ休まないようにしている」、「成績はできるだけＡ（優）を取ろうとしている」など授業にまじめに出席し、かつよい成績をとるように努力する項目から構成されている。そのため【成績重視】と命名した。

第二因子【授業外行動】

「授業中、授業に関係のない本を読んだり、他の勉強をしたりすることが多い」、「授業中に私語をすることが多い」など授業中に授業を聞く以外の行動をする項目から構成されている。そのため【授業外行動】と命名した。

第三因子【授業肯定】

「大学の授業では専門的知識を得られると思う」、「大学の授業では幅広い知識を得られると思う」など授業を肯定的にみる項目から構成されている。そのため【授業肯定】と命名した。

以上のように、授業に対する意識・行動は三つの因子で構成されている。以下では、この因子分析によって得られた因子得点をもとに、学習行動がいかに形成されているのか検討したい。

３．２　高校時代の日常生活との関係

まず、彼らの高校時代の日常生活との関係を検討しよう。表4は、学習行動と高校時代の日常生活との関係を示したものである。なお、高校時代の日常生活は、「あてはまる」「どちらでもない」「あてはまらない」の三段階で示されており、それぞれの該当者について各因子得点の平均値の差の検定を行った。

この結果からは、特に【成績重視】と【授業外行動】が高校時代の日常生活の影響を受けている様子がうかがえる。【成績重視】については、「校則をよく守る方だった」、「部活動に熱心に取り組んだ」、「アルバイト

表4. 高校時代の日常生活との関係

	成績重視				授業外行動				授業肯定			
	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない		あてはまる	どちらでもない	あてはまらない		あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	
校則をよく守る方だった	0.195	-0.091	-0.424	**	-0.235	0.217	0.308	***	0.140	-0.192	-0.064	
部活動に熱心に取り組んだ	0.109	0.084	-0.279	*	-0.033	0.239	0.030		0.070	-0.716	-0.020	*
アルバイトをよくした	-0.161	-0.303	0.158	*	0.093	0.293	-0.116		0.096	-0.066	-0.043	
カラオケによく行った	-0.004	-0.189	0.132		0.073	-0.096	-0.078		0.032	-0.193	0.064	
お酒を飲むことやタバコを吸うことに関心があった	-0.245	-0.336	0.125	**	0.587	0.086	-0.114	**	0.066	-0.105	0.017	
放課後や休日を友人とすごすことが多かった	-0.041	0.141	0.021		-0.009	0.019	0.028		0.070	-0.149	-0.225	
いつも流行の服装をするようにしていた	0.029	-0.075	0.057		0.049	-0.034	-0.018		0.076	-0.060	-0.020	
ボランティア活動をよくした	0.150	-0.066	-0.121		0.062	-0.150	-0.004		0.001	0.056	-0.042	
本をよく読んだ	-0.215	0.174	0.018		0.002	0.027	-0.016		0.009	-0.082	0.041	

註：表中の数値は因子得点の平均値を示す。***は P＜0.001、**は P＜0.01、*は P＜0.05。以下、同様に表記。

をよくした」、「お酒を飲むことやタバコを吸うことに関心があった」の項目で有意な結果が得られた。「校則をよく守る方だった」、「部活動に熱心に取り組んだ」については、「あてはまらない」から「あてはまる」になるにつれ値が大きくなっていた。また、「アルバイトをよくした」、「お酒を飲むことやタバコを吸うことに関心があった」については、「あてはまる」から「あてはまらない」になるにつれ値が大きくなっていた。すなわち、校則を守り、部活動に熱心に取り組み、アルバイトや飲酒、喫煙といった反学校的な文化になじみのない学生ほど、大学の授業において成績を重視する傾向にあることがわかる。

一方、【授業外行動】については、「校則をよく守る方だった」と「お酒を飲むことやタバコを吸うことに関心があった」の二つの項目について有意な結果が得られた。「校則をよく守る方だった」については、「あてはまる」から「あてはまらない」になるにつれ値が大きくなっていた。また、「お酒を飲むことやタバコを吸うことに関心があった」については、「あてはまらない」から「あてはまる」になるにつれ値が大きくなっていた。ここから、校則を守らず、未成年の時から飲酒や喫煙に関心をもっていた学生ほど、大学の授業中に居眠りや携帯メール等の他の行動をする傾向にあるということがわかる。では、こうした傾向は、大学入学以後もみられるのだろうか。続けて、検討したい。

３．３　大学入学後の日常生活との関係

表5は、学習行動と大学入学後の日常生活との関係を示したものである。大学入学後の日常生活についても、「あてはまる」「どちらでもない」「あてはまらない」の三段階で示されており、それぞれの該当者について各因子得点の平均値の差の検定を行っている。

この結果からは、まず、【成績重視】と【授業肯定】が大学をやめたいと思うか否かに影響されていることがわかる。【成績重視】【授業肯定】いずれも、「大学をやめたいと思うことがある」の項目の値が、「あてはまる」から「あてはまらない」になるにつれて大きくなっていた。すなわち、大学をやめたいと思うことのない学生ほど、成績を重視したり授業を肯定的に受け止めることができているということである。また、有意な結果は得られていないが、「教員のことで悩みがある」の項目でも、【成績重視】の値は「あてはまる」から「あてはまらない」になるにつれて大きくなり、【授業外行動】の値は「あてはまらない」から「あてはまる」になるにつれて大きくなるという傾向がみ

表 5. 大学入学後の日常生活との関係

	成績重視				授業外行動				授業肯定			
	あてはまる	どちらでもない	あてはまらない		あてはまる	どちらでもない	あてはまらない		あてはまる	どちらでもない	あてはまらない	
図書館をよく利用する	-0.228	0.145	0.056		0.097	-0.025	-0.050		0.132	-0.284	0.053	
小説やエッセイをよく読む	0.037	0.027	-0.112		-0.010	-0.015	0.021		0.104	-0.246	0.096	
友だちと食事やお酒を飲みに行くことが多い	0.358	-0.086	-0.062		-0.347	-0.006	0.070	**	-0.059	0.077	-0.002	
街ブラやショッピングをすることが多い	-0.186	0.079	0.005		-0.147	-0.537	0.086		-0.195	0.341	-0.022	
大学の外で友人と遊ぶことが多い	-0.142	0.023	0.006		-0.012	-0.176	0.033		-0.115	-0.030	0.022	
教員のことで悩みがある	0.093	-0.014	-0.365		-0.027	0.032	0.034		0.038	-0.144	0.111	
大学をやめたいと思うことがある	0.215	0.012	-0.413	***	-0.120	-0.008	0.211		0.182	-0.260	-0.139	*

られた。悩みのない学生ほど、よい成績をとるように努力し、授業外行動をしない様子がうかがえる。

さらに、【授業外行動】については、「友達と食事やお酒を飲みに行くことが多い」に「あてはまる」と回答した学生ほど値が大きくなるという特徴もみられた。友達と食事やお酒を飲みに行くことの多い、友人志向の学生ほど授業中に他の行動をしているということを示している。確かに、授業中の私語や携帯メールのやり取りは主に友人を相手になされるものである。授業中であっても友人とのやり取りを重視し、優先するという態度は変わらないということをこの結果は表しているのだろう。

３．４　教員に対する満足度との関係

さらに、教員に対する満足度との関係もみてみたい。表 6 は、学習行動と教員に対する満足度との関係を示したものである。教員に対する満足度については、「多い」「少ない」で示されており、それぞれの該当者について各因子得点の平均値の差の検定を行っている。

この結果からは、特に【成績重視】と【授業肯定】が教員に対する満足度の影響を受けていることがわかる。まず、【成績重視】については、「高度な研究能力をもつ教員」、「わかりやすい授業を行う教員」、「学生の意欲を引き出す教員」、「社会常識を身につけている教員」において有意な結果が得られた。いずれも「少ない」よりも「多い」と回答した学生の方が値が大きくなっており、研究能力がある教員、学生の立場にたって授業を進める教員、そして一般常識のある教員が多い場合、学生は授業に熱心に取り組んでいることがわかる。

【授業肯定】については、「高度な研究能力をもつ教員」、「わかりやすい授業を行う教員」、「学生の意欲を引き出す教員」、「学生の立場になって考える教員」に

表 6. 教員に対する満足度との関係

	成績重視			授業外行動			授業肯定		
	多い	少ない		多い	少ない		多い	少ない	
高度な研究能力をもつ教員	0.080	-0.234	*	-0.035	0.051		0.086	-0.426	**
専門分野の幅広い知識をもつ教員	0.054	-0.358		-0.026	0.031		0.016	-0.394	
専門を超えた幅広い知識・教養をもつ教員	0.084	-0.138		0.000	-0.081		0.040	-0.115	
わかりやすい授業を行う教員	0.195	-0.172	**	-0.086	0.043		0.208	-0.260	***
学生の意欲を引き出す教員	0.230	-0.135	**	-0.100	0.026		0.208	-0.143	*
学生の立場になって考える教員	0.112	-0.088		-0.021	-0.020		0.161	-0.212	**
社会常識を身につけている教員	0.090	-0.273	*	-0.035	0.018		0.049	-0.264	
倫理観を身につけている教員	0.002	0.020		-0.020	-0.022		0.058	-0.167	

表 7. 重回帰分析に使用する変数

従属変数	
成績重視 授業外行動 授業肯定	学習意識・態度に関する因子分析を行って得られた3つの因子（【成績重視】【授業外行動】【授業肯定】）の因子得点
独立変数	
学生特性	
入学前	
性別	男性なら1、女性なら0のダミー変数
中学時代の学習状況	中学3年時の成績
高校時代の学習状況	高校3年時の成績
高校時代の日常生活	高校時代の日常生活について因子分析を行って得られた3つの因子（【反学校】【友人志向】【授業外学習】）の因子得点
入学後	
大学入学後の日常生活	大学入学後の日常生活について因子分析を行って得られた3つの因子（【友人志向】【悩み】【読書】）の因子得点
授業外学習時間	授業と関係のない学習に費やす一週間の平均時間
学習以外に費やす時間	サークル・クラブ活動、アルバイト・仕事のそれぞれについての一週間の平均活動時間
専門性の獲得状況	専門的知識・技能についての獲得状況
教員特性	教員に対する満足度について因子分析を行って得られた3つの因子（【学生目線】【知識・研究】【一般常識】）の因子得点
専門的授業の満足度	専門分野が学べる授業・カリキュラムに対する満足度

おいて有意な結果が得られた。これらの項目についても、「少ない」よりも「多い」と回答した学生の方が値が大きくなっていた。研究能力がある教員、学生の立場になって授業を進める教員が多い場合、学生は授業を肯定的に評価することがわかる。

また、有意な結果は得られていないものの、それら以外の項目についても【成績重視】と【授業肯定】は、「少ない」よりも「多い」と回答した学生の方が値が大きくなっている。ここから、よい教員が多い場合、学生は成績を重視して授業に取り組み、授業を肯定的に受け止める傾向にあるといえよう。

３．５　学習行動の規定要因

以上の分析から、高校時代の日常生活、大学入学後の日常生活及び教員に対する満足度が、保育士養成課程に通う学生の学習行動に影響を及ぼしていることが明らかになった。しかし、これまでの分析では変数相互の影響力が考慮されていない。また、大学入学以前の学習状況や大学入学後のサークル・クラブ活動やアルバイト等の諸活動、カリキュラムに対する満足度との関係も明らかでない。そこで、保育士養成課程に通う学生の学習行動がどのように規定されているのか、重回帰分析によって明らかにしたい。

従属変数には、学習行動に関する因子分析を行って得られた三つの因子、【成績重視】【授業外行動】【授業肯定】を設定した。独立変数には、これまでみてきた「高校時代の日常生活」[註3)]、「大学入学後の日常生活」[註4)]、「教員に対する満足度」[註5)]に加え、大学入学以前の学習状況を知るため、「中学３年時の成績」、「高校３年生の成績」を設定した。さらに、大学生活との関係をより詳しく検討するため、「授業と関係のない学習に費やす一週間の平均時間」、「サークル・クラブ活動に費やす一週間の平均活動時間」、「アルバイト・仕事に費やす一週間の平均時間」を用いる。また、本人の能力獲得状況と授業の質が及ぼす影響も検討するため、「専門的知識・技能についての獲得状況」、「専門分野が学べる授業・カリキュラムに対する満足度」も挙げた。これら重回帰分析に用いる変数の詳細を、学生特性、教員特性、カリキュラム特性に分けて示すと表 7 の通りになる。

表 8 は、先の従属変数、独立変数を用いて行った重

回帰分析の結果である。ここからは、学生特性、教員特性、カリキュラム特性から受ける影響が、【成績重視】【授業外行動】【授業肯定】によって異なっていることがわかる。

【成績重視】については、「高校時代の学習状況」、高校時代の日常生活の「反学校」、大学入学後の日常生活の「悩み」、「授業外学習時間」、「アルバイト・仕事」の時間、教員特性の「知識研究」、「一般常識」において有意な結果が得られた。よい成績をとりたいと考え行動する学生は、高校時代の成績がよく、反学校的な行動をとっておらず、大学入学後も悩みがなく、授業外学習を行い、アルバイト等に没頭しすぎず、知識がある教員や一般常識のある教員が多いと評価していることがわかる。しかし、教員特性の「知識研究」、「一般常識」は、標準偏回帰係数（β）の絶対値が比較的小さい。知識があり、研究能力に優れた教員が学内に存在するか、あるいは専門的なカリキュラムが用意されているかよりも、高校時代の成績がよかったかどうか、反学校的な行動をとっていなかったかどうか、現在の生活で悩みを抱えていないか、アルバイトに時間を費やしすぎていないかということに影響を受けていることがわかる。

【授業外行動】については、高校時代の日常生活の「反学校」、大学入学後の日常生活の「友人志向」、「授業外学習時間」において有意な結果が得られた。授業中に他の行動をする学生は、高校時代に反学校的な行動をとり、大学生活において友人を大切にし、授業外学習の時間が少ないという特徴をもつことがわかる。この因子については、教員特性やカリキュラム特性といった大学側の努力が影響している様子がうかがえな

表 8. 学習意識・行動の規定要因に関する重回帰分析

	成績重視		授業外行動		授業肯定	
学生特性						
入学前						
性別	0.013		0.164		0.074	
中学時代の学習状況	0.113		-0.005		-0.022	
高校時代の学習状況	0.248	**	-0.118		-0.053	
高校時代の日常生活						
反学校	-0.232	**	0.202	*	-0.010	
友人志向	0.018		-0.159		0.038	
授業外学習	0.023		0.140		0.070	
入学後						
大学入学後の日常生活						
友人志向	0.109		0.296	**	0.142	
悩み	-0.225	**	0.160		-0.256	**
読書	-0.135		-0.067		-0.037	
授業外学習時間	0.152	*	-0.179	*	-0.080	
学習以外に費やす時間						
サークル・クラブ活動	0.025		0.009		0.102	
アルバイト・仕事	-0.267	***	0.029		0.035	
専門性の獲得状況	-0.071		-0.156		-0.046	
教員特性						
学生目線	0.007		0.001		0.056	
知識研究	0.145	*	0.019		0.226	**
一般常識	0.171	*	0.023		0.011	
カリキュラム特性						
専門的授業の満足度	-0.116		0.063		0.225	*
調整済み R2 乗	0.324		0.139		0.189	
F 値	5.235	***	2.424	**	3.059	***

い。授業中に他のことをしている学生は、授業内容や教員の対応がわからず、良いも悪いも評価できない。そうした状態をこの結果は反映しているのではなかろうか。なお、結果に比較的影響を及ぼしているのは、大学入学後の日常生活の「友人志向」である。授業中であっても携帯メールを返信したり、私語をしたりと友人への対応に忙しい学生は、日常生活においても友人との関係を重視しているということだろう。

【授業肯定】については、大学入学後の日常生活の「悩み」、教員特性の「知識研究」、カリキュラム特性の「専門的授業の満足度」において有意な結果が得られた。授業を肯定的に受け止める学生は、大学入学後の生活で悩みがなく、知識があり研究能力のある教員が多いと評価し、大学の専門的授業にも満足している。この因子は、他の因子に比べて、教員特性やカリキュラム特性の影響を大きく受けているといえよう。学生が授業を肯定的に受け止めるには、大学側の努力も欠かせないといえそうだ。その一方、こうした教員特性やカリキュラム特性よりも大学入学後の日常生活の「悩み」が与える影響の方が大きいという点にも留意しなければならないだろう。学生が授業を肯定的にとらえる背景には、大学の努力がある。しかし、その影響は彼女たちの日常生活における悩みの有無にはかなわないということではなかろうか。

4　おわりに

本稿では、保育士養成課程に通う学生の学習行動の規定要因について明らかにするため、学習行動に関する因子【成績重視】【授業外行動】【授業肯定】を学生特性、教員特性、カリキュラム特性という三つの視点から検討してきた。その結果、以下の三点が明らかになった。

1）【成績重視】は学生特性の影響を受けやすい。良い成績をとりたいと考え努力する学生は、高校時代の成績がよく、反学校的な行動をとっておらず、大学入学後も悩みがなく、アルバイト等に没頭しすぎない傾向にある。

2）【授業外行動】は教員特性やカリキュラム特性の影響を受けにくい。

3）【授業肯定】は学生特性、教員特性、カリキュラム特性すべての影響をうけやすい。その中でも、相対的に学生特性の及ぼす影響が大きい。

これらの結果をもとに、保育士養成課程における学習支援について考察すると、学生の層を想定することが重要になるといえるのではなかろうか。例えば、成績を重視する学生は、大学入学以前からまじめに学習していることが多い。教員特性の影響も受けるものの、その割合は相対的に小さい。そのため、大学入学後に改めて学習態度についてロやかましく指導するというよりも、大学入学時点でもともと備わっているやる気を失わせないよう、専門的な知識を提供することが必要になるだろう。一方、授業中に私語や携帯メールをするような学生に対してはより積極的な介入が求められる。彼女たちの行動は、教員特性やカリキュラム特性の影響を受けにくい。つまり、現在のＨ大学短期大学部の努力では、彼女たちの授業外行動に大きな影響を及ぼすことができていないのである。個別の対応や授業以外の時間を使うなど、今以上に細やかな対応をしていくことが必要とされる。反対に、授業を肯定的に受け止める学生は、教員特性やカリキュラム特性といった大学側の努力の影響を比較的受けやすい。特に専門領域に関する知識を評価する傾向にあるため、こうした観点から教員やカリキュラムを充実させる必要があると考えられる。なお、これは成績を重視する学生、授業を評価する学生に共通してみられたことだが、両者には大きな悩みがない。日々の声かけの中で、学生が大きな悩みを抱いていないか教員がケアしていくことが、結果として彼女たちの意欲的な学習へとつながるのではなかろうか。

以上、質問紙調査の結果から、保育士養成課程における学生の学習行動について検討してきた。しかしながら、本稿は、一大学のみの検討に留まっている。今

後、他大学でも調査を実施し、学習行動の規定要因について詳細に検討していくと共に、より現状を反映させた説明モデルを作成する必要があるだろう。その点については、今後の課題としたい。

［註］

註 1 平成 21 年 4 月時点での保育士養成施設は 583 ヵ所であり、そのうちわけは、大学 213 ヵ所、短期大学 263 ヵ所、専門学校 103 ヵ所、その他 4 ヵ所となっている（第 1 回保育士養成課程等検討会配布資料 保育士養成関係資料，厚生労働省，http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/11/dl/s1116-7h.pdf，2012 年 7 月 16 日）。最も数の多い短期大学についてみてみると、偏差値 50 を超える施設がほとんどないことが確認できる。また、専門学校については偏差値を公開していないところも多く、その選抜性の低さがうかがえる。

註 2 加藤（加藤麻里恵；保育者養成大学在学生における進学動機、就職希望および保育者効力感，保育士養成研究；27,29-36，2010）においては、偏差値 50 程度の四年制私立大学においても、目的意識なく大学に進学し、授業に集中できない保育士養成課程の学生の実態が報告されている。

註 3 高校時代の日常生活について、最尤法、バリマックス回転で因子分析を行った結果、「お酒を飲むことやタバコを吸うことに関心があった」「アルバイトをよくした」等で構成される【反学校】（寄与率 1.237）、「カラオケによく行った」「放課後や休日を友人とすごすことが多かった」等で構成される【友人志向】（寄与率 1.222）、「ボランティア活動をよくした」「本をよく読んだ」で構成される【授業外学習】（寄与率 0.791）の 3 つの因子が抽出された。

註 4 大学入学後の日常生活について、最尤法、バリマックス回転で因子分析を行った結果、「友だちと食事やお酒を飲みに行くことが多い」「大学の外で友人と遊ぶことが多い」等で構成される【友人志向】（寄与率 1.417）、「大学をやめたいと思うことがある」「自分のやりたいことがみつからない」等で構成される【悩み】（寄与率 1.220）、「小説やエッセイをよく読む」「図書館をよく利用する」で構成される【読書】（寄与率 1.171）の 3 つの因子が抽出された。

註 5 教員に対する満足度について、最尤法、バリマックス回転で因子分析を行った結果、「わかりやすい授業を行う教員」「学生の立場になって考える教員」等で構成される【学生目線】（寄与率 1.838）、「専門分野の幅広い知識をもつ教員」「高度な研究能力をもつ教員」等で構成される【知識研究】（寄与率 1.494）、「倫理観を身につけている教員」「社会常識を身につけている教員」で構成される【一般常識】（寄与率 1.128）の 3 つの因子が抽出された。

[引用・参考文献]

1) 厚生労働省；保育所保育指針，http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04a.pdf（2012 年 7 月 16 日）

2) 厚生労働省；保育所保育指針解説書，http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku04/pdf/hoiku04b_0001.pdf（2012 年 7 月 16 日）

3) 厚生労働省；保育士養成校，www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/hoiku_youseikou.pdf（2013 年 10 月 13 日）

4) 両角亜希子；大学生の学習行動の大学間比較，東京大学大学院教育学研究科紀要：49，192，2009.

5) 両角亜希子；学習行動と大学の個性，IDE 現代の高等教育：515 ，26-31，2009

6) 村澤昌崇；学生の力量形成における大学教育の効果，有本章編，大学のカリキュラム改革，玉川大学出版部，2003，75-89

7) 葛城浩一；大学教育の成果に対するカリキュラムの

影響力，博士学位請求論文　大学全入時代における学生の学習行動，64-75，2009

8）小方直幸；学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム，高等教育研究：11，45-64，2009

9）中原大介；保育体験実習が学生の学習意欲に及ぼす影響についての一考察，創発：4，95-106，2006

10）森知子；保育者を志す学生の自己効力感と実習評価の関係，臨床教育心理学研究：29（1），31-41，2003